〈研究ノート〉

人口減少地域から限界化する集落における定常態の集落実態とソーシャルワーク実践の必要性

――和歌山県 A 地区におけるインタビュー調査から――

御　前　由美子*，安　井　理　夫**，西　内　　章***
小榮住　まゆ子****

Actual Conditions during Ordinary Circumstances and the Necessity of Social Work in Marginalized Villages in Areas with Declining Populations: An Interview Survey in District A, Wakayama Prefecture

Yumiko Misaki, Michio Yasui, Akira Nishiuchi and Mayuko Koezumi

要旨：地域力の創造・地方の再生をめざして地域おこし協力隊・集落支援員制度も活発な一方で、どうしても消滅が逃れられない集落における「むらおさめ」に関する支援も避けられない現状がある。むらおさめについては「集落の人口減少、過疎化」→「集落構成員の自律性、主体性に基づく集落生活・機能の維持」→「集落生活・機能の限界化」→「集落構成員により合意形成された集落生活の撤廃」という過程が議論されている。そこで本研究では、集落の維持から集落生活の限界化に至る過程に着目し、最期までここでの暮らしに向き合い、受容し、行動し、集落としてのアイデンティティを表明するなど、村落住民の多様なパワーを活かしきれていない現状を調査研究によって明らかにし、必要とされるソーシャルワークのあり方を探求することを目的とした。その結果、(1) 昔の集落の思い出、(2) 集落の住民の特徴、(3) 集落の困りごと、(4) 困りごとへの集落の対応、(5) 集落の将来という 5 つのカテゴリーが抽出された。そこから、(1) 日々の生活の不便への支援、(2) 村落共同体として何を維持し何を断念するかという意思決定への支援、(3) その意思決定について批判が起こった場合の住民へのエンパワメント、(4)「迷惑をかける」ことへの危惧に対する支援、(5) 新たな試みや移住者への支援の 5 つを含むソーシャルワークが必要であることが示唆された。

Abstract: Regional development cooperation corps and community support worker programs are active in creating regional strength and revitalizing rural areas. On the other hand, it is also essential to support “village terminal care” in villages that are inevitably disappearing. “Village terminal care” is discussed as the following process: decline in population and depopulation of villages, leading to an inability to maintaining village life and functions that are reliant on villagers having autonomy and independence, which in turn results in the marginalization of village life and functions and finally the end of consensus-based village life. This study focused on the process from the maintenance of the village to the marginalization of village life. Through survey research, the study clarified the current situation in which the various powers of village residents, such as facing, accepting, and acting on village life until the end of their lives, and expressing their identity as a village, are not fully utilized. Ultimately, the study sought to explore the nature of required social work. As a result, five categories were identified: (1) memories of the village in the past, (2) characteristics of the villagers, (3) village problems, (4) village responses to problems, and (5) the future of the village. From this, it was suggested that social work is necessary, including in the form of the following five support

受付日　2023. 5. 9 ／ 掲載決定日　2023. 8. 30
*関西福祉科学大学　社会福祉学部　准教授
**関西福祉科学大学　社会福祉学部　教授
***高知県立大学　教授
****椙山女学園大学　教授

categories: (1) support for daily living inconveniences, (2) support for decision-making on what to maintain and what to abandon as a village community, (3) empowerment for residents when their decisions are criticized, (4) support for those who are concerned about “causing trouble,” and (5) support for new attempts and migrants.

Key words：ソーシャルワーク social work　集落の定常態 ordinary circumstances of the village　過程 process　村落住民の多様なパワー various powers of villagers

1. はじめに

わが国の集落消滅地域が増加の一途を辿っている。こうしたなか、総務省[1)]は、地域おこし協力隊、集落支援員、地域活性化企業人等さまざまな人材を投入することで地域力の創造、地方の再生をめざしている。地域おこし隊は、令和 3 年度で約 6,000 名いる隊員数を令和 8 年度には 10,000 人まで増やす目標が掲げられ、集落支援員も集落点検の実施、集落のあり方に関する住民同士・住民と地方公共団体の話し合いに積極的に関与する支援者として一層の活用が期待されている。ソーシャルワーク領域においても「人口減少地域」をテーマにした「創造性」「開発性」といった視点から議論が深められているところであり、行政・民間・地域住民との連携を超えた新たなソーシャルワーク実践が模索されている。

一方、地方の終活を直視せざるをえない現状から「むらおさめ」も議論されている。作野広和は、むらおさめについて、なし崩し的な集落の無住化を避けるために、無住化が予測される集落に対し、集落機能の消滅から無住化までの期間において、政策的、地域的な対応を実施すべきだ[2)]としている。そして、集落居住者の最後まで尊厳ある暮らしの維持にむけた取り組み、空き家利用や土地所有、土地利用のあり方の検討、知恵や技能、歴史や文化を次世代へつなげるためのアーカイブ化から対応する必要性[3)]を示している。

しかし、人口減少地域においては亀岡鉱平が指摘するように、多少の変化を被りながらも従来的な形のまま維持されている集落は少なくない[4)]ことから、集落活性化か限界集落化の二極化で議論するのではなく、定常態にある集落住民の現状について丁寧に理解・把握[5)]し、既存の政策的枠組みを超えた集落特性に合致する施策や支援を創造する必要があると考える。行政や民間等の「社会資源」があってこそ開発可能な実践に偏向する今日のソーシャルワーク研究においても、限界化する集落の定常態における実態から必要なソーシャルワークを創出することが必須となるだろう。

そこで本論文は、先行研究を通じて人口減少地域や限界集落をめぐる地域活性化、再生化にむけた施策の現状と課題及びむらおさめ、撤退に関する議論の整理により、人口減少地域から限界化する集落における問題をソーシャルワークの視点から明らかにする。そして、限界化する集落住民に対するインタビュー調査を通じて定常態にある集落住民の実体把握を行い、仮説を生成したうえで、限界化する集落に必要なソーシャルワーク実践について考察することを目的とする。

2. 人口減少地域から限界化する集落住民をめぐる現状と課題

（1）人口減少地域に対する地域活性化・再生化にむけた施策の現状と課題

総務省により 2014 年から施行されている「まち・ひと・しごと創生総合戦略」において、2020 年からは第 2 期の取り組みが開始されており、現在では、人口減少地域に対する地域力の創造・地方再生に向けて、地域おこし協力隊、集落支援員、地域活性化起業家などが活動をしている[6)]。地域おこし協力隊は、令和 3 年度で 6,015 名の隊員が全国で活動し、この約 65% は任期が終了した後にも同じ地域に定住している[7)]。このことから、感染症の影響で任期中に十分な活動が行えなかった隊員に対する任期を延長する特例を創設するとともに、隊員数を令和 8 年度までに 10,000 人に増やすことで地域おこし協力隊等の強化を図ろうとしている[8)]。また、「集落支援員制度」は、地域の実情に詳しく集落対策の推進に関するノウハウ・知見のある人材が集落への「目配り」として集落の巡回、状況把握等を実施するものである[9)]。集落支援員は市町村職員と協力して人口・世帯数の動向や通院・買物・共同作業の状況、農地の状況、地域資源、集落外との人の交流、UI ターン、他集落との連携の状況などを住民とともに点検し、集落の課題やあるべき姿に向けた住民同士や住民と市町村との話し合いを促進させる[10)]。これをもとに、自治体はデマンド交通システムなどの地域交通の確保や都市から地方への移住・交流の推進、特産品を生かした地域おこしといった「必要と求められる施策」につなげようとしている[11)]。さらに、「地域活性化起業人（企業人材派遣制度）」は、三大都市圏の民間企業等の社員を地方公共団体が一定期

間受け入れることで、その社員が地域活性化に向けた地域独自の魅力や価値の向上等につながる業務に従事する取組に対する措置であり、令和 3 年度における受け入れ自治体数は 258、活用人数は 395 人となっている[12)]。

また、総務省以外の管轄においても人口減少地域への施策は行われている。例えば、「地方創生移住支援事業」では、移住支援金の交付要件を「地域企業に新規就業した人」から「転職せずにテレワークなどで働く移住者」も対象範囲に含めるとともに、「既存住宅活用農村地域等移住促進事業」の農地付き空き家等の活用[13)]の他、「空き家再生等推進事業」による移住促進といった取り組みもなされている[14)]。移住だけではなく関係人口の拡大を目指した「全国二地域居住等促進協議会」も設立され、主な生活拠点とは別の地域に生活拠点をもうける二地域居住にも力を入れている[15)]。

しかし、総務省によると、地域おこし協力隊が活動している地域の 90% 近くは当面存続すると予測される集落であり、いずれ消滅するとされている集落での活動は 4.8%、10 年以内に消滅する集落では 0.8% にすぎないとの報告がある。同様に、集落支援員の活動も約 85% は当面存続すると予測される集落において行われ、いずれ消滅する集落では 5.8%、10 年以内に消滅する集落では 1.3% にすぎないとも報告されている[16)]。また、先行研究[17)]において、地域おこし協力隊の安易な移住や自分探しの無目的な移住により、結果的に再転出が多発していること、「就職（転職）」という動機からの応募も多いという報告から活動地に対する思いに希薄な隊員が相当いることへの問題が指摘されている。さらに、移住者の中には、気候の違いや地域行事への参加などから理想の田舎暮らしとのギャップを感じ、再び引っ越したいと考える場合も多く、移住者がその土地で暮らし続けるための心得を提示するといった取り組みがなされている地域もある[注1)]。

このように、現在、様々な施策によって人口減少地域に対する取り組みが行われているが、その支援の方向は集落の活性化・再生化であり、その焦点は当面存続すると予測されている集落であるということができる。しかし、10 年以内に消滅する可能性のある集落は 3,000 以上ある[18)]ことから、今後は、当面存続すると予測される集落のみならず、消滅の可能性にある集落にも着目していく必要があると考える。

(2) 人口減少地域から限界化する集落をめぐるむらおさめ・撤退の議論と問題

これまで見てきたように、人口減少地域に対する施策は、集落の活性化をめざした「むらおこし」型が主流となっているが、異なる考え方もある。

2040 年には 896 の市町村が消滅するという報告がなされて以降、市町村消滅や地方消滅の議論が巻き起こり[19)]、諦観が支配的な農山漁村地域では、将来に対する漠然とした不安や打つべき対策が見いだせないことから悲観的な発言が繰り返されるようになった[20)]。作野広和は、世帯数が著しく小さくなり、集落としての機能が完全に失われた状態を集落限界期、その後に残された世帯が消滅するまでを集落消滅期とし、集落限界期から集落消滅期においては、もはや集落の再生を意図した活性化策を講じても効果はないと述べる[21)]。また、このような集落の機能が喪失し、残った住民の自然消滅を待っているだけのような集落では、住民の生活の質も保たれないまま自然が集落を駆逐していくだけになってしまう。このため、集落の活性化を考えるのではなく福祉的なケアなどを行い、集落住民の「尊厳ある暮らし」を保障する手段を講じるべきであるとも述べている。そして、集落を「看取る」行為を行うとともに、集落の存在を記録として後生へ伝えていこうとする「むらおさめ」の考え方をすべきであり、集落の「秩序ある撤退」のための検討が必要であると主張している。

また、「少し引いて確実に守る（撤退）」という発想から、別の地域に「集落移転」を提案しているものもある。集落移転については、高齢者の土地への思いを無視した最悪の選択肢であるという意見が典型的とされている。しかし、林直樹は、移転した集落の事例をあげ、移転した人たちのほとんどが移転してよかったという感想をもっており、移転したことで集落での高齢者の代表的な不安をしっかりと解決していることへの言及に加え、これまでの仕事がない、下水道がないといった「足りないもの探し」の村づくりを批判し、今後は諦めるものを探していく側面の重要性を指摘している[22)]。

他方、このような「むらおさめ」や「撤退」とも異なる立場を主張するものもある。齋藤正己は、自治体の消滅可能性の問題が指摘されてはいるものの、単純に消滅するということはないと述べている[23)]。また、西野寿章は、「なぜ『むらおさめ』や『撤退』という文言を積極的に用いて、過疎山村の未来について語らねばならないのか、その意義が理解できない」として、集落の終焉を検討すること自体の必要性に疑問を呈している[24)]。

これらのことから、限界化する集落の方向性に関しては、活性化、むらおさめに加え、集落の終焉への検討を必要としているのかといった議論のあることがわかる。しかし、これらの議論は、集落住民が主体となって行われているものではなく、集落住民以外の研究者や支援者が中心となってなされていることも問題であると考えて

いる。

(3) 人口減少地域から限界化する集落に対する施策の問題

今後も消滅する集落は必然的にあらわれるという認識は、多くの研究者に共有されている[25]。すべての過疎集落の人口を長期にわたって維持するのが難しいということは明白であっても[26]、集落がすぐに消滅するわけではないことも事実である。総務省によると、10 年以内に消滅（無人化）する可能性があると予測されていた 508 集落のうち、4 年間で実際に消滅（無人化）したのは 47 集落（9.3％）であり、機能維持が困難な集落とされている 2618 集落（4.1％）についても 4 年前からはほとんど変化していないことが明らかとなっている[27]。

つまり、これまでは、あるべき集落や住民の姿という支援者の価値観にもとづいた、あるいは、それぞれの地域にあったスタイルで地域を持続させるといった活性化や再生化、むらおさめや撤退に向けた支援が進められてきたのであるが、亀岡航平が指摘するように、集落を活性化への支援、あるいは、終息に向かうための支援という人口減少地域をめぐる議論の二極化傾向ではなく、多少の変化を被りながらも従来的な形を維持している集落の定常態に着目した調査研究が必要であり、各集落に対する適切な認識をもつことが重要であるといえる[28]。

小田切徳美は、そこに住み続ける強い意志をもって集落を維持し、生活を続けている住民の存在について言及している[29]。また、花房尚作は、住民のなかには活性化を望む集落住民ばかりではなく、「変わらないことを望む人びとの姿があった。何一つ変わることなく、どこにも飛び立たず、廃れ、寂れ、衰えていくことを望む人びと」もいること、そして、「本当の意味での活性化は、そこで暮らしている人びとが楽しむことで生まれる。小さな楽しみの積み重ねが生き生きとした生活につながる」ことを指摘している[30]。このような集落に居住する人々は、生活条件の不利性に「何を変えて何を伝えるか」という取捨選択をしながら[31]、生き生きと生活を維持しているという事実[32]がある。そこには、渡辺裕一が指摘するように、集落固有の伝統的な習慣や生活様式、価値、文化、住民のその人らしさを尊重した支援[33]が必要だといえる。

以上のことから、支援者の主導のもとに集落の活性化やむらおさめを進めたり、支援者の価値観にもとづいた「あるべき村落や住民の姿」を目指したりするのではなく、支援者は人口減少地域から限界化にむかう集落の定常態に着目し、集落がどのようにして存続、変化してきたのか、そして、住民にはどのような力、主体性があるのかということを理解することが不可欠である。そのうえで、「ひとつの集落」ととらえる視点を持ち[34]、住民とともに今後の生活や集落の姿を集落住民とともに考えていくという、住民主体の支援が必要であると考えている。

そこで、集落機能や生活の維持が困難とされる消滅の可能性にある集落に着目し(注2)、住民の生活の様子や困難に対してこれまでどのように対処してきたのか、集落がどのように変化してきたのかなどについてのインタビュー調査を実施した。

3. インタビュー調査の概要と結果

(1) 調査の概要

調査の概要は、以下のとおりである。

①調査対象地域

対象地域は、和歌山県 A 地区（世帯数：17 世帯）である。集落付近に公共交通機関はなく、集落からもより駅までは約 5kmであるが、デマンド型の乗り合いタクシーが運行されている。また、集落におもだった産業はない。

②調査方法及び調査対象者

世帯ごとの個別インタビューを実施した。調査対象者は、調査日にインタビューが可能であり、かつ、同意の得られた住民 10 名を対象とした。また、その属性は、67 歳（女性）、71 歳（女性）、72 歳（男性）、73 歳（男性）、73 歳（女性）、76 歳（男性）、81 歳（女性）、83 歳（男性）が各 1 名、82 歳（女性）が 2 名である。

③調査時期

事前に調査の依頼を行い、2022 年 11 月に実施した。

④倫理的配慮

本調査は、関西福祉科学大学倫理審査委員会の承認（22-05）を得たうえで行うとともに、表記には人物が特定されないように、イニシャルではなく A さん、B さんといったアルファベットを用いている。

(2) 分析方法

分析は、佐藤郁哉の定性的コーディングを参考に質的分析を用いた。分析枠組みは、①5～10 年後に消滅可能性がある集落の歴史的経緯の解明（集落がこれまでどのような経緯を辿ってきたか）、②住民同士の助け合いの変化の特徴（集落で助け合いはどのように変化してきたか）、③衰退していく集落における住民の思いの解明（消滅の可能性がある集落への思いはどのようなものであるか）とした。

分析の手順は、インタビュー調査の逐語録をもとにコーディングを行った（コードの生成）。次に内容を一

般化するため、コードを検討してカテゴリーを生成した（カテゴリーの生成）。

分析結果については、研究者間でディスカッションを実施し、コード、カテゴリーの比較を継続的に行い、インタビュー調査時の様子や解釈を確認した。その後、分析結果を調査協力者に説明し、内容や解釈に間違いがないか確認してもらった。

(3) 分析結果

分析の結果、コードが29、カテゴリーが5であった。以下ではコードを《》、カテゴリーを【】で表記する。生成したカテゴリーは、【昔の集落の思い出】、【集落の住民の特徴】、【集落の困りごと】、【困りごとへの集落の対応】、【集落の将来】である。

①昔の集落の思い出

集落の住民が多かった頃を懐かしんでいる。昔は住民同士が顔見知りであり、生活に関わることを互いに教え合っていたようである。このカテゴリーのコードは、《集落で人の交流が盛んだった》、《集落で暮らして困ることがなかった》、《みんなで教え合って生活していた》、《みんな顔見知りで助け合っていた》、《集落の要望は自治会長から行政へ働きかけていた》、《昔の集落の様子は映写機で撮っているものもある》である。

表1のように「そうですね、この村でもまだね、住民だいぶ人数はまだありましたけども」（A さん）、「だからね、お葬式なんかのときは、私らが一番若い。先輩のおばさま方に教えてもらって、いろいろ料理の仕方とかね、いろいろ勉強になりましたね。あのときは。今はもう全然そんなことしない。」（C さん）という語りのように、昔の集落を思い出しながら、今の生活をみつめていることが理解できた。

②集落の住民の特徴

このカテゴリーのコードは、《集落が好きで長く住んでいる》、《昔はしんどいことも苦にならなかった》、《生活の困りごとは医師に持病を相談して気づく》《体が動くうちは集落で好きなことができる》、《できないことが増えてきて集落の人に迷惑をかけたくない》、《集落で集まることが減っているので話がない》の6つであった。表2のように「〇〇ちゃんって。この人ずっともう、ここで生まれて、ずっとここです。」（C さん）、「私らはもうほんまに田舎者やから、もうほんまに外のこと知らないから、話しすることも内容的にももうそんなに。」（A さん）のように集落に愛着があることが語られた。

一方で「もう、その当時は何も。つい邪魔になると思う人がやったらええんやというふうで言ってるし。邪魔になると思う人、邪魔になる人の一人だわね。一人ずつ

表1　昔の集落の思い出

カテゴリー	コード	逐語録の一部
昔の集落の思い出	集落で人の交流が盛んだった	そうですね、この村でもまだね、住民だいぶ人数はまだありましたけども（A）。
		その時分があったら、そうやな、僕らより年の上、もう今な、隠れてもうた人は、みんなサラリーマンが多いな（B）。
		来た当時はむっちゃくちゃ人が多かったわ。遊びに来る人が。そやから、すごい忙しかったです（A）。
	集落で暮らして困ることがなかった	ほんでもう、全然家から離れる機会がなかった（C）。
		（小学校の）分校があったんです。ここに（C）。
	みんなで教え合って生活していた	だからね、お葬式なんかのときは、私らが一番若い。先輩のおばさま方に教えてもらって、いろいろ料理の仕方とかね、いろいろ勉強になりましたね。あのときは。今はもう全然そんなことしない（C）。
		いろいろな什器類も、やっぱり、ある程度の人数分をして、回せるようにしてね（E）。
		今日もね、集会所を使うから、ほんなら、ちょっと、この前と横、草、刈ろうと思っていたんですよ（F）。
		ああ、そう。な、歩いてるのを結婚したとき見たし、ほいで、リヤカー引いてね、ずっと歩いてました。だから、そういう人やからね。その代わり、ちょっと勝手に畑の白菜（C）。
	みんな顔見知りで助け合っていた	今はみんな葬斎場で食事をしますけど、いつからかな。平成のね、うちのおじいさんが、この人のおじいさんが亡くなられたの、平成2年やったかな。そのときもみんなで助けていただいて、炊いてもらって、ここでみんなで食事してもらって（C）。
		なにしろそんなで、今までだったらそういうふうに、全然わけの分からんような人っていうか、この地区の中にはおらんけどもな（D）。
		人間関係とか、そういうのは、あまり考えたことがなかったんですよ。来て、女房のお父さんに連れられてあいさつに行ったんですね（G）。
		うん、そういうことはな、昔からな、やっぱりみんな近所同士助け合うっていうのは、結構あった土地やからね（C）。
	昔は、集落の要望があれば自治会長から行政へ働きかけていた	（昔は）こんなことをしていたら、高校ら、行くとき困るということで、ほいで、市のほうへ働きかけて、自治会長さんもしっかりした方やったんで（E）。
	昔の集落の様子は映写機で撮っているものもある	映写機が要るからって、映写機借りて、それがもう古くなって何もかも時代遅れで（H）。

表 2　集落の住民の特徴

カテゴリー	コード	逐語録の一部
集落の住民の特徴	集落が好きで長く住んでいる	○○ちゃんって。この人ずっともう、ここで生まれて、ずっとここです（C）。
		私らはもうほんまに田舎者やから、もうほんまに外のこと知らないから、話しすることも内容的にももうそんなに（A）。
	昔はしんどいことも苦にならなかった	切羽詰まってきて、どうしよう、こうしようっていうことは、1 回もないですわ、結婚してね（I）。
		ずっと、四十何年間も自分自身が、しんどいのに車で行けてっていうことは、やっぱり健康やったから、家族自体が全部が健康やったからね（I）。
	生活の困りごとは医師に持病を相談して気づく	もう先生ね、本当にもう、ちゃんと先生の判断で、ちゃんともう準備してくれてた。ほんで、お話ししてる間に、空いてるかとか言うて電話してくれてて、私よそのことやと思って、自分とこのことと思ってなかった。ああ、家のことやったと思って（H）。
	体が動くうちは集落で好きなことができる	うん、まだ、まあなあ。元気いうていうんかわからんけど、畑と野菜なんかも、ずっとつくっているしね。それは日常やっているんやけども。そんなんでもせな、こんなとこで、何もねえ。テレビばっかりとかよ、そんなん、見るのは見るよ（E）。
		うん、もう、暮らしは、まあ、仕事を辞めてから田舎やから、何かと自分の家の周りの草焼きをしたら、狭い畑をしたり、そんなんがあるんで、最近は、ちょっと頭、ここをね、手術してから 3 年ぐらいかな（I）。
		あちこち、ずっと探しとったんです。まだ現職やったから、別荘代わりいうたらおかしいけど（G）。
	できないことが増えてきて集落の人に迷惑をかけたくない	もうね、うちにみんな。でも、若いうちはね、まだどこの人も結構動いたけど、このごろはね、もうしんどくなってきてさ（C）。
		もう、その当時は何も。つい邪魔になると思う人がやったらええんやというふうで言ってるし。邪魔になると思う人、邪魔になる人の一人だわね。一人ずつ聞いていったらね（C）。
		ここは車に乗らなかったら不便だと思いますけども、みんな乗るんで（H）。
	集落の住民同士で何かすることは張り合いになる	それは、まあな、個人的に会ったら、ちょっとお話ししたりはするけど、雑談はするけど、同じことに向かってする、そのときは、別に、そんな話も、何もせえへんけど、それだけ習って、あれするだけのことでも、やっぱりな、張り合いっておかしいけど（E）。

聞いていったらね。」（C さん）のように集落の人々に迷惑をかけてまではこの集落に固執したくないという思いも語られた。

住民同士の交流では、「それは、まあな、個人的に会ったら、ちょっとお話ししたりはするけど、雑談はするけど、同じことに向かってする、そのときは、別に、そんな話も、何もせえへんけど、それだけ習って、あれするだけのことでも、やっぱりな、張り合いっておかしいけど。」（E さん）のように、集落で一緒に活動をすることがなくなる張り合いがなくなり、住民同士で挨拶や雑談をする程度の関係になっていることが語られた。

③集落の困りごと

このカテゴリーのコードは、《自分の家の管理が難しい》、《人口が減り人付き合いが減った》、《社会資源が減り不便になった》、《人が減り集落の管理ができなくなった》、《昔の家が多いので移住者にとって住みよい家ばかりではない》、《移住者は集落のことを知らないので付き合いづらい》、《移住者を受け入れることに反対の人もいる》、《集落の人数が少ないから行政に要望しても通らない》の 8 つであった。

具体的な語りは表 3 のように、「その周辺の土地ですね。もう、やっぱりどこともまあみんなそんな声は聞いてるんですけど、あの、草が本当に。」（H さん）や「ここの人が今、持ち主になっているけどね。その人は、もう旅館と違うて、普通の大阪の人やけども。家も古いから、修理したりして、いまだにもう何年もなるけど」（I さん）のように自分の家の管理が難しくなっていることが語られた。

また「1 人でできやんからな。何か、何かと思うぐらいの頭はずっと思っていたけどな、もうちょっとなあ、と思うような。でも、それはな、できやんし。もう諦めやな。」（E さん）や「人数が少ないから、なかなか思うように通らへんでね。市や県に言うても」（I さん）のように住民が亡くなっていくため集落の活動ができなくなって困っていることが語られた。

④困りごとへの集落の対応

このカテゴリーのコードは、《不便さを受け入れて自分でやれることをやる》、《移住者に対応に困っても住民は辛抱強く接する》、《一人一人とあった時は話をする》、《移住者に空き家情報を公開している》、《新しい交流は、もともとの交流があるからうまくできる》の 5 つであった。

具体的な語りは表 4 のように、「そうそうそう。だから自然、やっぱり何て言うの、ここで住んだらもうね、よそへ住まんっていうのは、やっぱりそれが自然のところな。」（C さん）のように不便な現状を受け入れながら集落で住み続けていることが語られた。また移住者の対応に困っても「この人そのへんは結構辛抱強いっていうか、根気があるっていうか。」（C さん）のように我慢して受け入れている。我慢ができる理由は「そういう下地

表 3　集落の困りごと

カテゴリー	コード	逐語録の一部
集落の困りごと	自分の家の管理が難しい	その周辺の土地ですね。もう、やっぱりどことも まあみんなそんな声は聞いてるんですけど、あの、草が本当に（H）。
		ここの人が今、持ち主になっているけどね。その人は、もう旅館と違うて、普通の大阪の人やけども。家も古いから、修理したりして、いまだにもう何年もなるけど（I）。
	人口が減り人付き合いが減った	昔は本当の田舎、何かあったらもうみんなで助け合うっていう感じの、そういうのがやっぱりもう薄くなって、自分とこは自分とこみたいな感じになってるわねえ。町田舎（まちいなか）やなあと思うんですけど（H）。
		それとお一人の人が多いっていうのも、あれなってくるし。もう人数的にも本当に選挙に来てくれっていったら、選挙の立ち会いに座ってくれる人のほうが多いかなって思うぐらい。極端やけどそれはまあそんな雰囲気です（H）。
	社会資源が減り不便になった	上通ったらもうほんまにほとんど下通らないようになるんで、この村に関係にある人しか来ないから（A）。
		うん、時刻書いてるけど、コミュニティバスとかいって。あのタクシーは呼んだら、自治会がちょっと負担してくれるような感じで、なんぼって決まって、どこまで（A）。
		自分 1 人でね、まだまだ動けるけどさ、バスね、あったらええけど、こんなデマンドバスとか、あんなことして、市はしてくれるけど、便利悪いんよね（E）。
		今、今は本当の老々介護、介護の世界に入ってると思うんです。最初はまだ言ってもみんな大変やねえ、大変やねえって言うてくれたけど、そんな大変とも別に思わずに頑張ってきてましたけどね（H）。
	人が減り集落の管理ができなくなった	1 人でできやんからな。何か、何かと思うぐらいの頭はずっと思っていたけどな、もうちょっとなあ、と思うような。でも、それはな、できやんし。もう諦めやな（E）。
		今、まあ小さい、結構小型なタクシーも走ってますけど、ああいうのを指定してあそこまで来てもらおうと思うとやっぱりね、邪魔になって行けやんとか言われたらな、そこですよ（C）。
		減るばっかりで。私お嫁に来て 45 年、結構人、自治会の班というのは 3 班に分かれてて。お宮さんのお掃除とかあるでしょう（C）。
		そんなんでね、いずれ、シルバーさんに頼まんならんかな、シルバーさんに頼むっていったって、そんなな、お金、ほんな、その都度、都度、集金せんなんしなあ、とかいうもんで（E）
	昔の家が多いので移住者にとって住みよい家ばかりではない	ほいで、もうね、なんか柱もしっかりしてそうやって言うけど、でもあかん、やめなさいって言うて、ほいで、まあ言うて、ほいで、それから違う人が買いましたけど、でも、長く住まなかって、また違う人に売ったけど、もうその人 1 回か 2 回来たけど、それから全然来ないしな（C）。
	移住者は集落のことを知らないので付き合いづらい	この人何にも、ずっとやられっ放しのときでもずっとこうやって黙ってにやにやしもって、何にも言わんと聞き逃してたの（C）。
		そうそう、ほんで、あの人の紹介でこんな人来たわって、こうってほんとなるもんね（A）。
		そやから、村とのつながりはほんまに、ほとんどその人らはないです（A）。
	移住者を受け入れることに反対の人もいる	そうそう、そうそう。今でもどっちかいうたら、交流、交通の便が悪いから、交流がある地域じゃないから、だから、さっきも言うたみたいに、どうしても視野が狭くなって、そこばっかり目がいってっていうふうなこと、それはあるわなって（F）。
		うんうん、と思うけど、やっぱりな、やっぱりそういう閉鎖的な考えの人も昔の人は多いけど、でもね、やっぱりね、どうしても私らでも、手伝ってほしいっていう気になるから（C）。
	集落の人数が少ないから行政に要望しても通らない	人数が少ないから、なかなか思うように通らへんでね。市や県に言うても（I）。

表 4　困りごとへの集落の対応

カテゴリー	コード	逐語録の一部
困りごとへの集落の対応	不便さを受け入れて自分でやれることをやる	そうそうそう。だから自然、やっぱり何て言うの、ここで住んだらもうね、よそへ住まんっていうのは、やっぱりそれが自然のところな（C）。
		テレビでね、番組で一軒家がええやらなんやかんやって言うけどね、どこがほんま。みんな好んで見てるけどよ。そこ行ったらどれだけ（D）。
	移住者に対応に困っても住民は辛抱強く接する	この人そのへんは結構辛抱強いっていうか、根気があるっていうか（C）。
	一人一人とあった時は話をする	やっぱり、健康のために、あれかな、やっぱり、それは背筋を伸ばしたり、腹筋してみたり、どこまで腹筋、そんなんで（E）。
	移住者に空き家情報を公開している	初め見に来た人はな。だから、そういうネットとかに載せたら、興味があって（C）。
	新しい交流は、もともとの交流があるからうまくできる	そういう下地は、やっぱり前から自治会なんかでお宮さんの掃除をしているとか、そういう下地があったからなんだけど（G）。

表 5　集落の将来

カテゴリー	コード	逐語録の一部
集落の将来	将来、集落が維持できなくなる	まあこのごろねえ、お一人頑張ってくれる人がおってね。村もあれしていかないかん、一緒になっていかないかんっていうので、何か、今月 17 日とかバーベキューをやりますとか言うてね。参加してくださいとか言うてくれてるけど、私おばあちゃんおるから行けないわって言うと、そうしてその、ちょっと来て食べてまたあのすぐ帰ってくれてもええしとか言うて、奥さん言うてくれてたけどね（H）。
		なんかね、みんなが「〇〇ちゃんせんようになったら誰もせえへんわ」ってね（C）。
	集落を維持するためには移住者を受け入れたい	（若い人が来てほしいと思うか）そうなんや（D）。
		あそこ空き家になってるんやけども、潰すのにも費用かかるしで、誰か住んでくれたらいいのにないう感じで言うてるんやけど、誰か言うてくれたら声かけてっていうて言って、そこの持ち主の人言うてきてはるんやけどね（A）。
		せやから、ほんまに交流がちゃんとできたら、僕はだんだん、なくなっていくんちゃうかなっていう気がしているんです（G）。
	子どもたちには無理に集落に住んでほしくない	もう住んでる人の息子さんはいてても、もう別に無理にこっち帰ってこいとは言わないし、ね。私とこも娘二人で、二人とも長男さんのとこへ行ってね、向こうのお父さん・お母さんもおるし（A）。
	今の自分の生活を変えることは難しい	うーん、変えようがないもんね、今まで来たやつを。そやから、今まで、こうやろう、もっと、あと 10 年も 20 年も若ければ、まだ考えることもあるかわからん、84、85 もなってきたら、もうなあ、のんびり畑をするぐらいしかないもんね（I）。

は、やっぱり前から自治会なんかでお宮さんの掃除をしているとか、そういう下地があったからなんだけど。」（G さん）とこれまで集落の行事などの交流で培った経験を前向きにとらえていることもわかった。

⑤集落の将来

このカテゴリーは、コードとして《将来、集落が維持できなくなる》、《集落を維持するためには移住者を受け入れたい》、《子どもたちには無理に集落に住んでほしくない》、《今の自分の生活を変えることは難しい》の 4 つであった。

具体的な語りは表 5 のとおりである。「なんかね、みんなが「〇〇ちゃんせんようになったら誰もせえへんわ」ってね。」（C さん）のように将来、集落を維持できる人がいなくなることを心配している。「せやから、ほんまに交流がちゃんとできたら、僕はだんだん、なくなっていくんちゃうかなっていう気がしているんです。」（G さん）と移住者ともきちんと交流ができればうまく共同できると考えていることもわかった。

一方で「もう住んでる人の息子さんはいてても、もう別に無理にこっち帰ってこいとは言わないし、ね。私とこも娘二人で、二人とも長男さんのとこへ行ってね、向こうのお父さん・お母さんもおるし。」（A さん）と、自分の子どもたちには集落での生活を望んでいない複雑な心情がある。

そして、「うーん、変えようがないもんね、今まで来たやつを。そやから、今まで、こうやろう、もっと、あと 10 年も 20 年も若ければ、まだ考えることもあるかわからん、84、85 もなってきたら、もうなあ、のんびり畑をするぐらいしかないもんね。」（I さん）の語りにあるように、自分の生活様式を変えることは難しいと思っていることも語られた。

4. 考　察

これまでこの村落では、共同体としての村落を維持する文化が住民の暗黙の了解として存在していたと考えられる。たとえば、葬式や結婚式などで用意する料理の作り方を先輩のおばさま方に教えてもらう、そのために必要な什器類などが用意されている、あるいは共同で使う場所の整備（草刈り）もみんなで助けあって行うなどである。これらはこの村落では「当たり前」のことであり、調査協力者たちも自然に行うようになったと語っている。

ただ、このようにみんなで助けあうこと（共同体として機能すること）がこの村落では自明のことだったため、共同体としての機能に貢献できなくなる事態をおそれていることもうかがえる。それが「迷惑をかけたくない」という語りだと考えられる。

「身体が衰える」には①身の回りの不便さと②共同作業に参加できなくなることへの危惧の 2 つの側面があると考えられるため、ここからは、この「身体が衰える」をめぐる語りについてみていきたい。

まず、①身の回りの不便さについてである。これについては介護保険のサービスを利用して対処しようと考えている。「自分の生活を変えることは難しい」ため「不便さを受け入れて自分でやれることをや」り、それができなくなれば「ヘルパーさんに入ってもらう」という思考の流れだと考えられる。家の管理についてもこれに準じて考えてよいと思われる。

このことをふまえて②について考えてみると、まず「自分の生活を変えることはむずかしい」ので、ここに住み続けるためには、村落の維持が不可欠、具体的には共同で使う場所（神社や集会所）の管理（草刈りや掃除

など）に参加できることが前提とされているのである。それに参加できなくなる（身体が衰える）ことは「迷惑をかける」ことであり、それが危惧されているのだと考えられる。

これらのことから、調査協力者たちがいちばん切実だと感じているニーズは、集落の環境の維持や管理なのではないだろうか。そのためには、迷惑をかけないような身体の自己管理と、活動のなかで当たり前に行われていた交流の場を維持または用意することだと考えられる。これらは、年齢を重ねる事による身体の変化や住民の減少が原因だと考えられるので、これまで培ってきた生活様式が習い性となりストレングスとして機能している一方で気がかりの種ともなっていると考えられる。したがって、これまで当たり前（暗黙の了解）であったことは、もはや能動的に働きかけなければ維持できなくなっているというふうに思考を転換すること、そして将来迷惑をかけあうことは人間として自然なことであり、そのことを前提とした村落のあり方を模索することの2つが必要となるだろう。

ただ、将来のことを考えると、若い人（リーダー、役割を引き継げる人材）に移住してきてほしいので、空き家情報を公開するなど、新しい試みも行っている。移住者を受け入れることについては必ずしも意見が一致しているわけではないが、これまで培ってきた下地があるため、それほど困難ではないのではないだろうか。この点に関しては村落共同体としての行動様式がストレングスとして機能すると考えられるからである。

以上のことをふまえると、現在盛んに行われている「村おこし」などのように、弱った身体にカンフル剤を打って元気にするようなやり方ではなく、今できることとできなくなったことを見極め、残すこととあきらめることを選択しながら存続していくような支援も必要だと考えられる。これは、なにを買い、なにを先送りにしたりあきらめるのかという家計のやりくりに似ていると考えられる。

中村佳子は著書『科学はこのままでいいのかな』のな

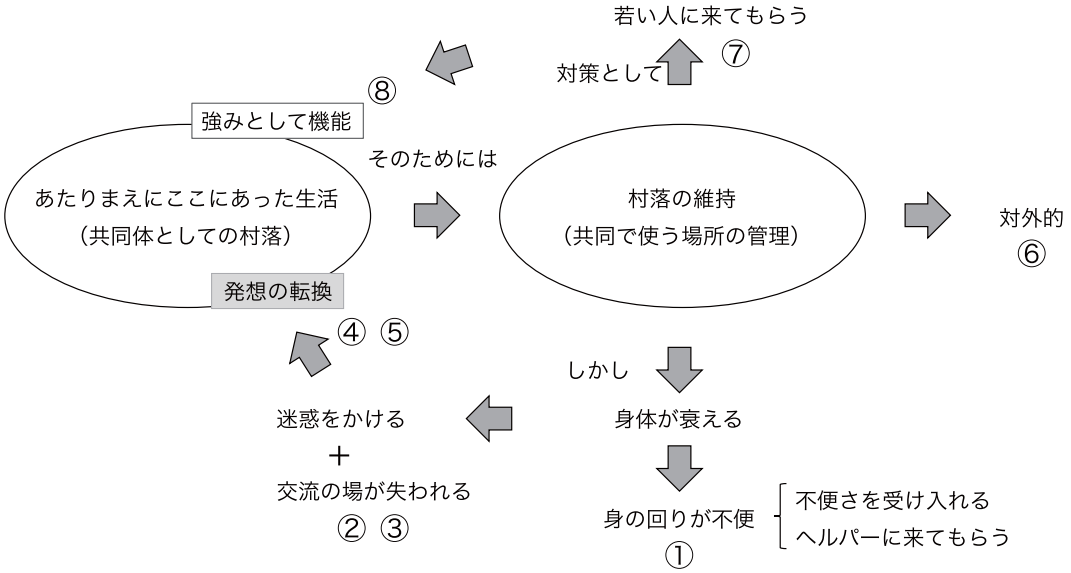

図1　住民のニーズとそれらに対応したソーシャルワーク
注：この図の①から⑧は下記1から8に対応している。

（日常生活への支援）
1．身体の衰えによる日々の生活についての不便に具体的に対処すること（ケア・マネジメントやボランティアのコーディネートなど）
（集会の支援）
2．どこかに集まって行うなにかの活動を仲介またはコーディネートすること
3．集まった機会に活発な交流をファシリテートすること（グループワークの相互作用モデルなど）
4．それを基盤として、村落共同体としての活動のなにを維持し、なにをあきらめるのかを意思決定する手伝いをすること（同上）
（生き方・価値観への支援）
5．「迷惑をかける」ことをダメなことだと考えるのではなく、「迷惑をかけたり、かけられたりするのが自然な人間の姿であって、人が生きていくうえではごく当たり前」[42]のことなのだと思考の転換を手助けすること（ナラティブ・アプローチなど）
6．もしその意思決定について批判が起こった場合には住民をエンパワメントすること
（新たな試みや移住者への支援）
7．空き家情報を公開して移住者を募るなどの新しい試みを支援すること
8．移住者と住民との交流を支援すること

かで、進化とは「もともとあるものを少しずつ変化させて新しい機能を加えてきた」歴史であり、いままであったものを「ガラリと変え」るのではないと述べている[35]。したがって「地球上にはまさに多様、さまざまな自然があるので、そこに合った暮らし方があって当然」[36]だということになる。一言で言えば「進化は、すでにあるもの（あり合わせ[37]）の上手な組み合わせ」[38]であり、基本は同じだけれども「そこに少しずつそれぞれに必要なはたらきが加わってきたもの」[39]なのである。

したがって、村落に対する支援も多様であることが自然なので、そのひとつとして、中村佳子の「進化」の考え方に沿ったソーシャルワークがあってよいと考えられる。また、中村は「共生はただ共存するという意味ではなく、それぞれがその特徴を活かしながら共にあることによって新しい生き方を創り出していく姿」[40]だとも述べているので、「成長だけを求めて一つの価値観の下に競争する」[41]のではなく、すなわち従来考えられていたように人口減少にともなっていわゆる「限界集落」に向かうという衰退または撤退（それがたとえ尊厳のあるものであったとしても）のプロセスとして理解するのではなく、ありあわせのものを上手に組み合わせて、あるいは取捨選択するような進化としてとらえることも必要だと考えられる。

これまでのことをまとめたうえで、それぞれのニーズに対応させるかたちで今回の調査研究から示唆されるソーシャルワークを示したものが図 1 である。

村落の行く末を進歩またはそのプロセスへの回復、あるいは衰退または撤退という単一のベクトルで考えるのはなく、村落の置かれたさまざまな自然や条件に合わせて、それらに合った暮らし方を多様な選択肢のなかから取捨選択していく進化として支援するようなソーシャルワークのデザインは、SDGs の価値観や世界観、あるいは IFSW（国際ソーシャルワーカー連盟）のソーシャルワーク専門職のグローバル定義（2014 年）[43]にもマッチしていると考えられる（表 6 を参照）。

5. おわりに

持続可能な地域共生社会の実現にむけたソーシャルワーク研究において、人口減少地域における産・官・民の協働による創造的かつ共創的なソーシャルワーク研究は大きな関心事の 1 つである。そこからさらに人口が減少した「限界化する集落」は、人口減少地域を構成するいずれかの集落で起こり得る、決して先延ばしにできない地域の生活問題といえる。こうした状況をふまえ、本研究では、限界化する集落に焦点化した必要なソーシャルワーク実践について考察することを目的とした。

はじめに行った人口減少地域から限界化する集落をめぐる先行研究調査では、施策優位、支援者主導の集落活性化かむらおさめかという 2 つの観点から施策や議論が

表 6　本論文で提案した支援の発想とグローバル定義、SDGs の対照表

本論文で提案する支援の発想	グローバル定義	SDGs
村落の行く末を進歩またはそのプロセスへの回復、あるいは衰退または撤退という単一のベクトルで考えるのはなく	経済成長こそが社会開発の前提条件であるという従来の考え方には賛同しない。[1]	経済　継続的で、だれも取り残さない、持続可能な経済成長[3]
村落の置かれたさまざまな自然や条件に合わせて、それらに合った暮らし方を多様な選択肢のなかから取捨選択していく	多様性の尊重[2]	民族や文化　さまざまな人種、民族、文化が尊重される世界[4] 4-7　持続可能な生活のしかた[5] 11-3　だれも取り残さない持続可能なまちづくり[6] 12-8　持続可能な開発や、自然と調和したくらし方に関する情報と意識[7]

注
1）IFSW「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」https://www.ifsw.org/wp-content/uploads/ifsw-cdn/assets/ifsw_64633-3.pdf 2023/07/14 閲覧
2）同上
3）公益財団法人日本ユニセフ協会「読んでみよう　SDGs の宣言・前文」https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/preamble/ 2023/07/14 閲覧
4）同ホームページ
5）公益財団法人日本ユニセフ協会「4. 質の高い教育をみんなに」https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/17goals/4-education/ 2023/07/14 閲覧
6）公益財団法人日本ユニセフ協会「11. 住み続けられるまちづくりを」https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/17goals/11-cities/ 2023/07/14 閲覧
7）公益財団法人日本ユニセフ協会「12. つくる責任、つかう責任」https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/17goals/12-responsible/ 2023/07/14 閲覧

進められるなかで、多くの集落が位置づけられる「集落の定常態」にある集落住民の暮らしに寄り添った実態把握の必要性が求められていることがわかった。

そこで、全 17 世帯と限界化する和歌山県 A 地区の集落で賛同をえた住民 10 名に対し、集落の維持から集落生活の限界化に至る過程に着目した生活について個別インタビュー調査を実施し質的分析を行った。その結果（1）昔の集落の思い出、（2）集落の住民の特徴、（3）集落の困りごと、（4）困りごとへの集落の対応、（5）集落の将来という 5 つのカテゴリーが抽出され、最期までここでの暮らしに向き合い、受容し、行動し、集落としてのアイデンティティを表明するなど、「限界集落」という悲壮感漂うラベルからは想像できない村落住民の多様なパワーがあることを仮説として生成できた。しかし、こうしたパワーは個人に内在化され、集落住民と共有されることなく活かしきれていない現状が明らかとなっていると考えられる。

これらをふまえ、限界化する集落に必要とされるソーシャルワークのあり方について（1）日々の生活の不便への支援、（2）村落共同体として何を維持し何を断念するかという意思決定への支援、（3）その意思決定について批判が起こった場合の住民へのエンパワメント、（4）「迷惑をかける」ことへの危惧に対する支援、（5）新たな試みや移住者への支援が必要ではないかと考えた。

しかしながら、定常態にある限界化する 1 集落での調査結果をもとにした考察、示唆であることは本研究の限界である。今後、他地域で同様の状況のなかで生活する集落住民への実態調査を丁寧に行い、未着手である限界化集落におけるソーシャルワーク実践研究を深めていくことが今後の課題である。

最後に、インタビュー調査にご協力いただいた和歌山県 A 地区の住民の方々に感謝申し上げる。

注

注 1）　福井県池田町では、①集落の一員であることへの自覚を持つこと、②出役を求められる地域行事の多さの認識とそれらに協力すること、③支え合いの習慣を理解すること、④自己価値観を押し付けないこと、⑤プライバシーが無いと感じるお節介を理解すること、⑥濃い人間関係を積極的に楽しむ姿勢を持つこと、⑦自然の驚異への自覚を持つことという「池田暮らしの七か条」を提示している。（https://www.town.ikeda.fukui.jp/pick/pickjukyo/p002780.html. 2023 年 3 月 15 日閲覧）

注 2）　総務省（2020）「過疎地域における集落の状況に関する現況把握調査最終報告（概要版）」によると、10 年以内に消滅の可能性がある集落の 8 割以上は人口規模が 9 人以下、24 人以下が約 15%、また、世帯数規模では 9 割以上が 9 世帯以下、約 5% が 19 世帯以下となっていることから、住民が 24 人以下の集落を対象とした。

参考文献

・佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法－原理・方法・実践－』新曜社.

引用文献

1）総務省「過疎地域等における集落対策の推進要綱」https://www.soumu.go.jp/main_content/000800137. 2023 年 2 月 2 日閲覧
2）佐野広和（2010）「中山間地域における集落の小規模・高齢化と無住化――中国地方の実態を中心に――」『人文地理学会大会』人文地理学会，20-21.
3）同書 21．及び佐野広和（2006）「中山間地域における地域問題と集落の対応」『経済地理学年報』52，経済地理学会，279.
4）亀岡鉱平（2020）「農業集落への現代的視点――実態への再接近に向けて――」『調査と情報』76，農林中金総合研究所，17.
5）同書，17.
6）総務省「過疎地域等における集落対策の推進要綱」https://www.soumu.go.jp/main_content/000800137. 2023 年 2 月 14 日閲覧
7）総務省「地域おこし協力隊」https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyosei08_03000066.html. 2023 年 2 月 14 日閲覧
8）総務省「令和 4 年　地域力創造グループ施策について」https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/ 2023 年 2 月 15 日閲覧
9）総務省地域力創造グループ過疎対策室「集落支援員について」https://www.soumu.go.jp/main_content/000845763.pdf. 2023 年 3 月 10 日閲覧
10）同 URL.
11）同 URL.
12）前掲 8）.
13）内閣府「内閣官房・内閣府総合サイト」https://www.chisou.go.jp/sousei/index.html. 2023 年 3 月 15 日閲覧
14）国土交通省「空き家再生等推進事業の概要」https://www.mlit.go.jp/common/001091836.pdf. 2023 年 3 月 20 日閲覧
15）国土交通省「全国二地域居住等促進協議会」https://www.mlit.go.jp/2chiiki/index.html. 2023 年 3 月 15 日閲覧
16）総務省「過疎地域における集落の状況に関する現況把握調査最終報告（概要版）」https://www.soumu.go.jp/main_content/000678496.pdf. 2023 年 3 月 15 日閲覧
17）薮下保弘・伊部泰弘・髙橋祐実・兼田有梨（2018）「新潟県の地域おこし協力隊制度の現状と課題」『地域活性化ジャーナル』24, 23-37. 浅井秀子・熊谷昌彦（2021）「人口減少地域における移住希望者及び移住者の意向調査から

みる定住に向けた有効な支援策の検討――鳥取県の事例――」『日本建築学会技術報告集』27(66)，902-907.
18）前掲 16.
19）竹内亮（2016）「〈特集 1〉シリーズ田園回帰（1）藤山浩著『田園回帰 1% 戦略　地元に人と仕事を取り戻す』」『財政と公共政策』60, 41-47.
20）作野広和（2019）「人口減少社会における関係人口の意義と可能性」『経済地理学年報』65, 10-28.
21）前掲（2）.
22）林直樹（2011）「過疎集落からはじまる戦略的な構築と撤退」『農村計画学会誌』29(4)，418-421. 林直樹（2015）「山間地で求められる農村戦略」『農村計画学会誌』34（1），51-54. 林直樹（2016）「人口減少社会の先進地としての過疎地域」飯田泰之他『地域再生の失敗学』光文社新書.
23）齋藤正己（2020）「交流人口と二地域居住――地方都市のまちづくりへの新しい提言」『地域イノベーション――』12, 39-47.
24）西野寿章（2012）「21 世紀初頭における日本の山村の現状とその類型」『高崎経済大学論集』54, 41-57.
25）片岡佳美（2012）「集落の過疎・高齢化と住民の生活意識――島根県中山間地域での量的調査データをもとに――」『山陰研究』5, 19-31. 郷堀ヨゼフ、西尾孝司（2017）「実存・未来・福祉――中山間村落における地域福祉に関する一考察――」『淑徳大学社会福祉研究総合福祉研究』22, 169-182.
26）林直樹（2011）「過疎集落からはじまる戦略的な構築と撤退」『農村計画学会誌』29(4)，418-421.
27）前掲 16.
28）亀岡鉱平（2020）「農業集落への現代的視点――実態への再接近に向けて――」『調査と情報』76，農林中金総合研究所，16-17.
29）小田切徳美（2016）『農山村は消滅しない』岩波書店，216-217.
30）花房尚作（2022）『田舎はいやらしい――地域活性化は本当に必要か？――』光文社新書，115.
31）神崎宣武（2021）『日本人の原風景　風土と信心とたつきの道』講談社学術文庫，281.
32）中條曉仁（2016）「高齢者の生活にみる農山村の価値」『日本地理学会発表要旨集』2016s(0)，100136.
33）渡辺裕一（2017）「限界集落の住民の生活や意識はどのように変わったのか――A 市 B 市における繰り返し横断調査データから――」『武蔵野大学人間科学研究所年報』6, 127-136.
34）御前由美子、安井理夫、小榮住まゆ子（2019）「限界集落論をめぐる現状とソーシャルワークに基づく課題――先行研究レビューを通じて――」『関西福祉科学大学紀要』23, 1-8.
35）中村佳子（2022）『科学はこのままでいいのかな－進歩？いえ進化でしょ』筑摩書房，90.
36）同書，91.
37）同書，107.
38）同書，98.
39）同書，100.
40）同書，108.
41）同書，108.
42）稲田恭明「コラム 53　迷惑はかけてもいい」『運営委員・相談員のコラム』東京大学大学院法学政治学研究科・法学部学習相談室
https://www.j.u-tokyo.ac.jp/adviser/column/n-53/ 2023 年 5 月 7 日閲覧
43）日本ソーシャルワーカー連盟（JFSW）「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」
https://jfsw.org/definition/global_definition/ 2023 年 5 月 7 日閲覧